高機能広汎性発達障害者に対する「エブリクラブ」の実践に関する報告（第２報）

佐々木　全*・加藤　義男**

（2009年３月４日受理）

Zen SASAKI and Yoshio KATOU

A Practical Study of “Eburi Club” for Young Men with High Functioning Pervasive Developmental Disorders (2)

Ⅰ　問　　題

筆者らは，「高機能広汎性発達障害児・者を考える会（通称，エブリの会）」を立ち上げ，高機能広汎性発達障害児者とその保護者の支援を行っている（佐々木・加藤・田代：2004[1]）．高機能広汎性発達障害とは，知的障害を有さない広汎性発達障害である．これには，「自閉性障害のうちの高機能群（高機能自閉症）」，「アスペルガー障害」，「特定不能の広汎性発達障害のうちの高機能群」が内包される．

さて，エブリの会の中核的活動となっているのが，小学生を対象として開催している「エブリ教室」である．そして，エブリ教室を「卒業」した（エブリ教室の対象年齢を越えたという意味）．中学生以上の年齢，すなわち青年期（思春期を含む）の彼らを対象として，筆者らは2003年３月から「エブリクラブ」を開催している（佐々木，加藤，2003[2]）．

現在，高機能広汎性発達障害を含む，いわゆる発達障害児者の青年期が注目を集めている．例えば，大学を含む，高等教育機関における支援（佐藤，徳永，2006[3]；山口，2006[4]；西村，2006[5]；日本ＬＤ学会研究委員会研究プロジェクトチーム，2008[6]），就労（近藤，光真坊，2006[7]；清水，加賀，山本，内藤他，2006[8]），さらには触法や矯正教育（梅下節瑠，2004[9]；松浦，岩坂，藤島，橋本他[10]），など様々な切り口からの報告がある．青年期が注目される理由には，二つあるのではないかと推察する．一つ目に，1990年前後から学童期のいわゆる発達障害児が，青年期を迎え，当時想定していた「彼らの将来」が現在となり，現実となったことがある．例えば，筆者らの身近では，エブリ教室の第一期生であった当時の小学校４年生は，現在二十歳となった．

そして，二つ目に，青年期を迎えた彼らの多くが示す不適応的な姿がある．それは，例えば，中学校や高等学校での適応上の困難さであり，就労や進学などの進路選択や，日常的な対人関係や生活習慣などに関わる困難さである．それらは，支援状況の不備不足との表裏であることは言うまでもない．その支援状況に関してはそれぞれのシーンで，理解と対応の度合いの「温度差」や「地域格差」を有しながら多様であり，整備途上であると思われる．

そこで，本稿では，青年期支援の一環として位置づけられるエブリクラブの実践を報告し，その意義を検討したい．

＊岩手県立盛岡みたけ支援学校，岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究協力員　　＊＊岩手大学教育学部

Ⅱ　目的と方法

本稿は，「高機能広汎性発達障害児者の支援に関する実践的研究(3)」として筆者らが取り組む一連の研究に位置づけられるものである．この目的は，青年期の高機能広汎性発達障害者に対する，よりよい支援のモデルを提起することである．支援モデルとは，支援の方針，内容，方法論などを包括する．特に筆者らは，方法論としての支援方法の開発と蓄積への関心が強い．

この足掛かりとして，本稿では，エブリクラブの意義と方針を検討し，明らかにすることを目的とする．

研究の方法は，2005年度から2008年度までのエブリクラブの活動について，逸話記録を報告し，それをもとに検討する．逸話記録は，活動後発行の会員宛の通信（「エブリ通信」）とスタッフの事後ミーティングの記録に基づく．検討の観点として，以下の２点を挙げる．すなわち，①活動の目的の明確化，②目的の達成に即した支援方法である．なお，支援方法については，「活動」，「物」，「人」の三観点（佐々木，加藤，2008[11]）から分析する．

Ⅲ　結　　果

１．活動の概要

エブリクラブの活動実績を表１に示した．年度ごとの開催回数は，2005年度からは年４回開催した．

また，エブリクラブの参加者（以下，メンバーと称する）は，年度ごとに登録の意思確認を行い，活動の案内を送付している．2008年度現在，メンバー登録のある参加者は15名である．その概要を表２に示した．「エブリ教室卒」のメンバーに加え，エブリクラブから参加したメンバーもいる．彼らの居住地は，盛岡近隣地域のみならず，岩手県内各地であり，保護者からの個別的な相談を筆者らが受けたケースである．いずれのメンバーも，医学的な診断の有無を問わず，高機能広汎性発達障害の特徴が認めらる．

さらに，エブリクラブの活動における展開（活動の流れ）を表３に示した．これは，「タグ・ラグビー」（2007年度）のときの例であるが，おおよそは他の活動とも共通している．

集合時，シェアリングシート（その日の感想などを記録する用紙）への記名や，近況を話すなど，スタッフとの顔合わせをしながら，打ち解けられるようにしている．導入時には，その日参加のメンバーの顔ぶれを確認しあい，中心活動内容の説明や展開の見通しなどを進行役のスタッフが説明する．その後，チームを決めたり，チームでの活動準備などの共同作業をしたりする．中心活動の場面では，ルールの説明や，動きの確認をウォーミングアップと称して取り組んだ後に本格的にゲームを行う．同時進行でチームでの作戦会議などが随時もたれる．ゲーム終了後には結果の確認をし，一喜一憂しながらジュースを買って飲んで近況を語り合ったり，活動をふりかえったりする．このときに，シェアリングシートの記入をする．感想を話し合ったり，次回の活動予定を確認しあったりし，その後に解散する．

２．活動の経過

(1)　2005年度の例（初回の活動「風船バレー」）

年度の第一回目のエブリクラブでは，エブリ教室を卒業し，４月に中学生になるメンバーが新たに参加する．そこで，新たな仲間と活動を共有しやすいように，チームで取り組む内容を準備した．メンバーとスタッフ混合で４チームを編成し，リーグ戦を行った．各チームでチーム名や戦略を考えゲームに臨む．他のチームがゲームをしている間には，得点の記録などの役割を分担し合った．

風船バレーは，室内にコートを設営し，膝立ちの姿勢でプレーする．ボールゲームに苦手意識があるメンバーでも風船の動きには対処しやすく，また，チームごとの戦略によって，活躍の場面をつくりやすいと思われた．

得点に関するルールの要点は次の２つである．①ラリーポイントで５点先取すると，ゲーム終了．

表１　エブリクラブの活動実績（2008．９．現在）

開催日		活動名	活動内容	活動の場	参加者		備考
2005年度	３／21	風船バレー	４チームに分かれ,「風船バレー」のリーグ戦を行うもの.「風船バレー」は，床に膝立ちで行い，得点を競った.	実践センター	中学生５人	きょうだい３人，エブリ教室の小学生１人	中学生のうち１人は，エブリ教室卒業生ではなく，第二筆者が紹介した児であり，M市からの参加である.
	８／６	カードめくりゲーム	４チームに分かれ，リーグ戦を行うもの.カード衣めくりゲームは,チーム対抗で,床一面に置かれた表裏が紅白のカードを一斉に巻りあい，制限時間内で,自チームの色(紅白のいずれか)の数を競う.	実践センター	中学生８人		中学生のうち１人は，エブリ教室卒業生ではなく，第二筆者が紹介した児であり，K市からの参加である.
	９／23	遠足	２チームに分かれ，芋の子汁を調理し，会食を行った.	盛岡市内のキャンプ場	中学生６人，高校生１人	きょうだい３人，エブリ教室の小学６年生１人エブリ教室の小学生10人	・エブリ教室との合同の活動である. ・高校生の１人は，エブリ教室卒業生ではなく，第二筆者が紹介した児であり，M市からの参加である.
	１／14	カルタ大会	二チームに分かれ，読み札（自作の３つのヒント）を読み上げ，それに該当する絵札を獲ることを競った.	実践センター	中学生３人		
2006年度	３／21	風船バレー	４チームに分かれ,「風船バレー」のリーグ戦を行うもの.「風船バレー」は，床に膝立ちで行い，得点を競った.	実践センター	中学生５人，高校生１人	きょうだい２人	中学生には，エブリ教室を「卒業」したばかりの２人を含む.
	５／20	バスケットボール	２チームに分かれて，バスケットボール（簡易ルール)などを行った.	実践センター，及び体育館	中学生３人，高校生１人		
	９／23	遠　足	２チームに分かれ，芋の子汁を調理し，会食を行った.	盛岡市内のキャンプ場	中学生６人	きょうだい４人，エブリ教室の小学生６人	エブリ教室との合同の活動である.
	１／８	ものづくり	毛筆とその展示パネルの製作を行った.	実践センター	中学生６人	きょうだい２人，幼児（スタッフの子ども）１人	中学生のうち１人は，エブリ教室卒業生ではなく，第二筆者が紹介した児であり，M市からの参加である.
2007年度	３／21	風船バレー	４チームに分かれ,「風船バレー」のリーグ戦を行うもの.「風船バレー」は，床に膝立ちで行い，得点を競った.	実践センター	中学生２人，高校生６人	きょうだい２人，幼児（スタッフの子ども）１人	中学生には，エブリ教室を「卒業」したばかりの２人を含む.
	６／23	タグラグビー	２チームに分かれ，タグラグビー（変則ルール）の対抗戦を行った.	実践センター及び周辺の広場	中学生３人，高校生５人，成人（18歳以上）１人	きょうだい２人	
	９／22	遠足	２チームに分かれ，芋の子汁を調理し，会食を行った.	盛岡市内のキャンプ場	中学生３人，高校生３人	きょうだい４人，エブリ教室の小学生５人	エブリ教室との合同の活動である.
	１／12	ものづくり	木製ペンたての製作を行った.	実践センター	中学生２名，高校生３名	きょうだい１人	
2008年度	３／20	ミッションラリー	３チームに分かれ，それぞれが携帯電話で「本部」からの「ミッション」を聞き取り，それを遂行した.	実践センター，岩手大学構内及び周辺	中学生６人，高校生３人，成人１人	きょうだい３人，エブリ教室の小学生１人	中学生には，エブリ教室を「卒業」したばかりの１人を含む.
	６／14	プール，温泉	民間施設にて，プール，温泉を利用し，会食を行った.	S町の民間施設	中学生４人，高校生２人，成人１人	きょうだい２人	
	９／20	遠足	２チームに分かれ，芋の子汁を調理し，会食を行った.	盛岡市内のキャンプ場	中学生３人，高校生３人，在宅１人	きょうだい３人	エブリ教室との合同の活動である.
	１／10	ものづくり	（本稿執筆中の時点では未実施）				

＊活動における便宜上，３月の活動では，学年を新年度のもので表している.

表２　参加者の概要　（2008年現在の登録者）

参加者登録番号	性別	年齢	所属	居住地域	エブリ教室への参加の有無	エブリクラブへの参加開始時期	発達における特性や対人関係のタイプなど（筆者らの臨床的判断）	備考
1	男	13	中学校（特別）	盛岡及び周辺地域	有（2008.2.まで）	2008.3.	自閉症傾向，受動的対人関係	弟（小学３年生）も参加.
2	男	13	中学校（特別）	盛岡及び周辺地域	有（2008.2.まで）	2008.3.	アスペルガー障害傾向，孤立的対人関係	弟（小学６年生）も参加.
3	男	13	中学校（通常）	県央部Ｋ市	無	2008.3.	アスペルガー障害傾向，孤立的対人関係	第二筆者の紹介による参加.
4	男	14	中学校（特別）	盛岡及び周辺地域	有（2007.2.まで）	2007.3.	アスペルガー障害傾向，積極奇異的対人関係	妹（小学３年生）も参加.
5	男	14	中学校（通常）	県北部Ｉ町	無	2008.3.	自閉症傾向，孤立的対人関係，強迫神経症傾向	第一筆者の紹介による参加開始.
6	男	15	中学校（特別）	盛岡及び周辺地域	有（2006.2.まで）	2005.3.	アスペルガー障害傾向，受動的対人関係	姉（高校３年生）も参加経験有り.
7	男	15	中学校（特別）	盛岡及び周辺地域	有（2006.2.まで）	2007.3.	自閉症傾向，受動的対人関係	
8	男	17	（在宅）	盛岡及び周辺地域	有（2004.2.まで）	2004.3.（近年は不参加）	アスペルガー障害傾向，受動的対人関係，過剰適応傾向	弟（高校１年生）も参加.
9	女	17	養護学校高等部	盛岡及び周辺地域	有（2004.2.まで）	2000.6.	自閉症傾向，受動的的対人関係	エブリクラブの前身であるエブリ同窓会から参加.
10	男	17	高等学校	県南部Ｏ市	無	2004.3.（年1回程度のペースで参加）	アスペルガー障害傾向，受動的対人関係	第一筆者の紹介による参加開始.
11	男	17	高等学校	沿岸部Ｍ市	無	2005.3.	アスペルガー障害傾向，受動／積極奇異的対人関係	第二筆者の紹介による参加開始.
12	男	17	高等学校	県央部Ｈ市	無	2005.3.	アスペルガー障害傾向，積極奇異的対人関係	第一筆者の紹介による参加開始.
13	男	19	（社会人）	沿岸部Ｍ市	無	2005.9.	アスペルガー障害傾向，受動的対人関係	第二筆者の紹介による参加開始.
14	男	20	（社会人）	盛岡及び周辺地域（現在，宮城県に転居）	有（2000.3.まで）	2000.6.（近年は不参加）	特定不能のＰＤＤ傾向，孤立的対人関係	エブリクラブの前身であるエブリ同窓会から参加.
15	男	20	養護学校専攻科	盛岡及び周辺地域	有（2000.3.まで）	2000.6.（近年参加を再開）	自閉症傾向，受動／積極奇異的対人関係	エブリクラブの前身であるエブリ同窓会から参加.

＊ＤＳＭ-Ⅳ，ウイングの対人関係分類を参照した.

表３　エブリクラブの活動の内容と展開例

時間	活動内容	
10：00	集合，自由時間	個別でのスケジュールの確認，シェアリングシートへの氏名等の記入，メンバーやスタッフとの会話.
10：15	はじめの会	メンバーやスタッフの顔ぶれの確認，活動内容の確認．活動の準備（タグラグビーのチームを決める，チーム名を話し合ったりチームのメンバー表や得点表示板を作成する），屋外の広場に移動.
10：20	中心活動	(1) ウォーミングアップのゲーム（タグ獲り鬼の変則ゲーム） (2) タグラグビー対戦（作戦会議，試合） (3) 試合の結果確認
11：45	休憩	自動販売機のある大学の食堂前の広場に移動し，各自飲み物を購入し，タグラグビーの話題を入れながら各々会話.
12：15	解散	シェアリングシートを記入し，感想を話し合う．次回の活動日程を確認し，解散.

②勝敗は，ラリーポイントに「あたたかいメッセージポイント」を加えた合計点で決まる．そのために，ラリーポイントによるゲーム終了のタイミングには戦略を要することになる．すなわち，自チームが勝っているときにゲームを終了させる必要がある．

なお，「あたたかいメッセージポイント」とは，チームメイト同士での励ましや労い，喜びを分かち合ったりすることを促進するため，かつ，ソーシャルスキルの獲得を目指して設定したものだった．得点の記録用紙とその使用例を図１に示した．また，活動の様子として，以下の逸話記録があった．

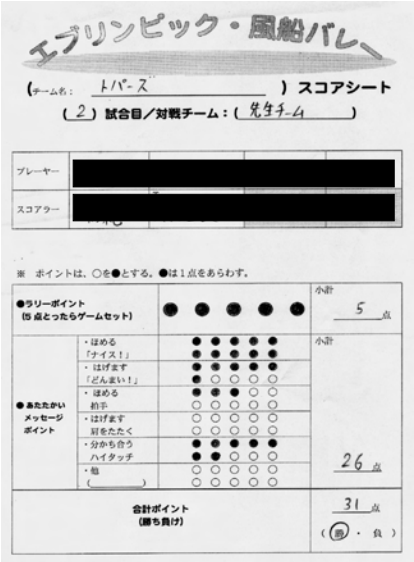


図１　「風船バレー」の得点記録用紙

・「チームびっくり人間」の成績は，一勝一敗一引き分け（得点差で三位）．義仁君がスパイクを決めチームを勢いづけました．亨君は，風船が手元に来るとにっこり笑って，鮮やかに打ち返しました．駿平君は，失敗すると「すみませんでした～」と額を床につけるほどの土下座．これがチーム内でウケて，流行しました．俊樹君は，「お姉ちゃんが応援してくれました」とゲーム中のことを振り返りました．チームの得点は，１試合目の「ラリーポイント」が５点，「あたたかいメッセージポイント」が４点だったのに対して，２試合目はそれぞれ５点，11点．３試合目は３点，24点．試合数をこなすごとに，「あたたかいメッセージポイント」を増やしました．

・「ＡＡＯＴＹチーム」の成績は，一勝一敗一引き分け（得点差で二位）．奈美さんと恵一君は，風船を譲り合い，「おっとと」と，周囲も慌てました．勇二君は，風船を独占する勢いで打ち合いをしました．チームの１試合目の「ラリーポイント」が１点，「あたたかいメッセージポイント」が15点，２試合目はそれぞれ５点，19点．３試合目は５点，28点．というように，常に「あたたかいメッセージポイント」で高得点を挙げていました．

ちなみに，近年「風船バレー」に取り組んだ際には，「あたたかいメッセージポイント」を廃止した．しかし，チームメイトと共にゲームに打ち込めるようにと，「あたたかいメッセージ」は「喜び合ったり，励ましあったりしましょう」というスタッフの呼びかけ，提案として示した．各チームでは，「あたたかいメッセージ」をメンバーの一部やスタッフがリードしながら，より自然な形で，かつ豊富に交換していた．その一例として，次のような逸話記録（2006．３．）がある．

・風船バレー，同郷の義仁君と弘毅君が，ネット際に立ちはだかり，スタッフチーム相手にスパイクを連発．それが決まると，「よ～し」と二人がハイタッチ，コート内の勇二君も両手を広げチームを盛りたてます．コートサイドのスタッフやお子さんたちからも歓声があがりました．

⑵　2006年度の例（年度４回目の活動「ものづくり」）

年度の終わりのエブリクラブでの取り組みである．メンバー一人一人が存分に自分の活動に打ち込み，その成果を分かち合えることをねがった．2006年度の「ものづくり」は，毛筆作品とそれを飾る木製パネルを製作した．

毛筆作品では，紙に自分の好きな言葉を書き記し，木製パネルに貼り付ける．木製パネルは，予

めスタッフが製材した木材を組み合わせ，スプレー塗装，組み立てを行う．木製パネルのフレームは，スプレー塗装かガストーチによる焼き目付けの二種類の方法いずれかを選んで行う．完成した作品は，参加者相互に鑑賞しあった．作品例を図２に示した．また，活動の様子として，以下の逸話記録があった．

図２　「ものづくり」の作品例

・「遠く，速く，走る」を書した太一君，「ネジをうちこむのが面白かったです」と　フレームの組み立てをふりかえりました．ドライバーの操作に苦心しながらも，最後はねじ頭をぴたり収め「よしっ」と小さく拳を握りました．
・義仁君は，「俺は焼く！」とガスバーナーに挑戦．焼き目を入れたフレームが完成．その後，電動ドライバーを慎重に操作してパネルを組み立てました．趣味だという水墨画を貼り付けた会心作です．

⑶　2007年度の例（年度２回目の活動「タグ・ラグビー」）

年度の第二回目のエブリクラブでは，仲間と共に存分に活動してほしいとねがい，一回目の風船バレーに引き続いて，チームで取り組む内容を準備した．メンバーとスタッフ混合で２チームを編成し対戦した．チームごとでチーム名や戦略，役割分担を考えゲームに臨む．

タグ・ラグビーは，ラグビーの簡易普及版である．大まかなルールは，次のとおりである．１チームを４～５名で編成する．タグベルトを装着し，マジックテープでタグを二本貼り付ける（腰の両側）．攻撃では，ボールを持って走り込むと「トライ」で得点となる．パスは自分よりも後ろにいる味方に行う．守備では，ボールを持っている相手のタグを獲ること「タグ」で相手の進行を止める．タグを獲られた攻め手は，立ち止まりそこから味方にパスを出してプレーを再開する．得点があった場合やルーズボールを奪った場合，タグを５回連続で獲った場合（「タグ５」）などには攻守交代する．　接触プレーがないこと，攻撃プレーでの，ボールを抱えて走るという容易さ，守備プレーでの，相手のタグを獲るという目的の明確さがあり，かつ，豊富な運動量を確保できる題材だと思われた．

なお，今回のような単発の活動でもメンバーが取り組みやすいように，ルールを簡略化し変則化し提示した．その要点は次の２つである．①チーム内で守備と攻撃の役割分担を行う，②両チームの攻守役それぞれが出場する場面を設定しゲームを行う．つまり，野球形式のゲームである．「１回の表」にはＡチームの攻撃であり，Ａチームの攻撃役が出場し，Ｂチームの守備役が出場する．「１回の裏」には，Ａチームの守備役が出場し，Ｂチームでは攻撃役が出場する．３アウトならぬ，５タグで攻守交替となる．

ゲームに先立っては，チームごとのメンバー表と得点表示板を作成した．これを図３，図４に示した．また，活動の様子のスナップ写真を図５に示した．また，活動の様子として，以下の逸話記録があった．

・「シャークローバー」の勇二君は「あ！」と指さしで相手の気をそらす作戦にでましたが，その瞬間自分の尻尾をとられる失策に苦笑．康生君はタグを取らせましと相手の腕を払いのけながらゴールを目指しました．勝利君が迫りライン際に追い込んだ相手をスタッフの

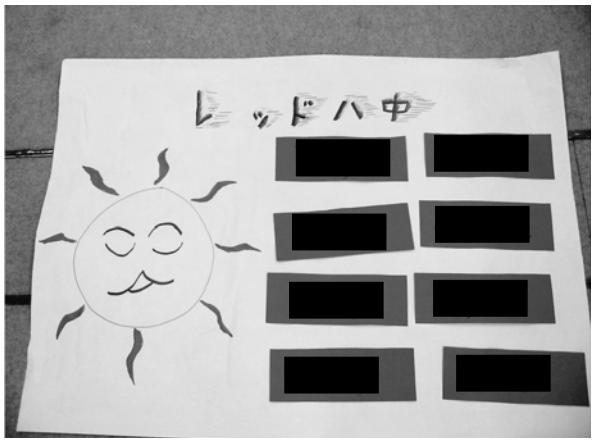


図３　「タグ・ラグビー」のメンバー表

図４　「タグ・ラグビー」の得点表示板

図５　「タグ・ラグビー」の様子

さとこさんが狙うコンビプレー．保奈美さんは私のパスを受け苦心のトライ，その後，タグを２本獲る好プレーも披露．

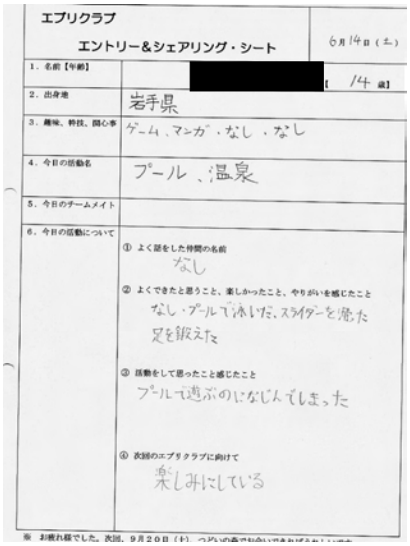
・「レッド八中」，攻めては圧倒的な走力でゴールに駆け込む高校生トリオ．義仁君がサイドライン際を抜き去ります．守備側がそちらに目を奪われると，逆サイドに弘毅君，広大君が切れ込みます．守っては，亨君の大きな手がタグに向けて伸びます．俊樹君と充子さんも小回りを利かせ，タグを狙いました．

⑷　2008年度の例（年度２回目の活動「プールと温泉（民間施設利用）」）

年度の第二回目のエブリクラブでは，１人のメンバーからのリクエストに応じて活動内容を企画した．具体的には，Ｓ町のＬ施設の温泉，プール，昼食のパッケージコース（有料）を申し込み，活動した．メンバーそれぞれが楽しめる活動であり，仲間と一緒に活動を楽しみ味わってほしいとねがった．

活動の様子として，以下の逸話記録があった．

・メンバーの感想を記した「シェアリングシート」を図６に示した．「プールで遊ぶのに馴染んでしまった」との記載は，思いのほか夢中になって活動したという意味のようである．これを記述したメンバー良介君は，エブリクラブに参加して間もなく，もともと対人関係には慎重な性格のようだった．エブリクラブにおいて，周囲とのかかわりを慎重に模索している様子があり，スタッフとして参加した第一筆者とのかかわりが中心だったが，エブリクラブの活動において，仲間と一緒に過ごす時間や活動を，緩やかに過ごし始めた様でした．


エブリクラブ
エントリー＆シェアリング・シート
6月14日（土）

1．名前【年齢】	[redacted] 14 歳
2．出身地	岩手県
3．趣味、特技、関心事	ゲーム、マンガ・なし・なし
4．今日の活動名	プール、温泉
5．今日のチームメイト	
6．今日の活動について	① よく話をした仲間の名前 なし ② よくできたと思うこと、楽しかったこと、やりがいを感じたこと なし・プールで泳いだ、スライダーを滑った 足を鍛えた ③ 活動をして思ったこと感じたこと プールで遊ぶのになじんでしまった ④ 次回のエブリクラブに向けて 楽しみにしている

図６　「プールと温泉」でのシェアリングシート

・水に肩まで浸かっていた良介君は，時折綺麗なフォームで泳いでいました．英明さん，ウォータースライダーを繰り返し楽しみました．孝明君は，お父さんと水しぶきを上げながら歓声を上げています．慶太君もそこに混ざったり,静かに水に浸かっていたり,リラックスムードです．第二陣がすぐに合流しました．水に浸かりながら話し込む二人，義仁君と勇二君，思い立ってウォータースライダーへ．バタフライを披露した充子さん，今度は潜水です．何気にその場にいた康生君も潜っていました．

・一郎君，久しぶりの温泉だということでした．遅ればせながら，私が脱衣所に行きましたら，もう上がるところでした．その後はロビーで土産物を眺め，ねらいを定めました．

・「行きましょう」と良介君が私に声をかけてくれました．湯船に入ると，慶太君がほてりをさますかのように，湯船の周りを行ったり来たりしているのが見えまました．その向こうに，泡の出る浴槽に浸かりその仕組みをじっと観察する孝明君の姿，さらにその向こうには，義仁さんがお父さんの背を流しているのが見えました．

・湯上り組がロビーで寛いでいると，プール満喫組が戻ってきました．充子さんの笑顔が見えました.「ケンジワールドがよかったのに」との訴えは康生君．それは初耳．ご要望として承りました.「正午までプールに入っていたい」と事前には食い下がった英明さんでしたが，スケジュール通りの11時45分に，着替えて出てきました．

Ⅳ　考　　察

１．エブリクラブの意義の検討

エブリクラブの意義を明らかにするために，活動の目的を検討する．

筆者らは，これまでエブリクラブにおいてソーシャルスキルトレーニングを目的に掲げ，試みてきた．年に３～４回で，１回あたり２時間程度の活動であっても，相応のスキルアップを見込むことができた（佐々木，加藤，2005[12]）．その名残があるのが，2005年度の「風船バレー」の実践であった．ここでは「あたたかいメッセージ」を強化するために，それがゲームの勝敗にも関連付けられている．

かつてのエブリクラブでは「ソーシャルスキルの獲得」が第一義的な目的としてあり，仲間とのかかわりの深化はその結果として位置づけられ，活動の内容及びそれに対する取り組みの態度（興味関心，モチベーション）は全て「ソーシャルスキルの獲得」のための手段として位置づけられていた．しかし，上述した事例では，2006年度以降，第一義的な目的を，活動自体をよりよく取り組むことを掲げている．具体的には，活動に打ち込むこと，仲間と共に活動の経過や成果を分かち合うことなどがねがいとして挙げられている．

このような方針転換は，エブリ教室における方針転換の影響を受けた．筆者らは，エブリ教室のあり方を，今日的観点から検討し，以下を指摘している（佐々木，加藤，2007[13]）．すなわち，①エブリ教室やエブリクラブのような，インフォーマルな支援グループの強みは，その機動性と独自の発想によって公的支援の狭間を補うこと自体にある．それは，放課後支援，休日の支援に代表さ

れること，②自立的・主体的な活動（～させられる活動よりも～する活動）としての休日活動を実現したいこと，である．特に，②について，筆者らは，「自立と社会参加」という特別支援教育の目標を，「訓練の後に，その成果をもって実現される」と考えるのではなく，「今，ここのライフステージ，あるいは活動場面での実現」を目指す．すなわち，エブリクラブを社会参加の一場面と理解し，そこでの自立的，主体的な活動を実現することを目指し，それをもって「自立と社会参加」と見なす．それは，彼らにとって，それぞれが満足いく活動であり，「自己実現の場」になることである．ここでいう「自己実現」は，「活動に打ち込むこと，仲間と共に活動の経過や成果を分かち合うこと」のようなねがいの先に記した表現で具現化を想定している．

以上から，エブリクラブの目的は，休日活動における，メンバーの自己実現である．それは，自立的，主体的活動として「活動に打ち込むこと，仲間と共に活動の経過や成果を分かち合うこと」との具現化するものである．それが，エブリクラブの意義となる．

２．エブリクラブの成果と課題

エブリクラブの成果は，二つの観点によって規定される．①エブリクラブの目的による．すなわち，「メンバーの主体的・自立的な姿」がいかに実現していたか，ということである．②本研究そもそもの目的である．すわわち，支援モデルの提起に資することができたか，特に「高機能広汎性発達障害児・者に対する支援方法の開発・蓄積」がいかになされたかということである．

①は，結果にて記した参加者の姿（逸話記録）の分析をもって説明されることが必要だと思われる．これは，活動の目的（ねがい）とそれを実現するための支援方法，それによって得られた結果における因果を説明することである．この手続きによって②も必然的に満たされる．

そこで，ここでは，メンバーの主体的・自立的な姿の実現に資した支援方法について，支援方法の三観点からの検討を試みる．

⑴「活動」に関する例とその検討

支援の三観点の一つ，「活動」とは，活動の内容と展開方法に関する事柄である．大きくは年間の活動計画と，毎回の活動計画を視座とする．

・年間の活動計画

この年間活動計画とメンバーの姿を照らし合わせての検討を行うにあたっては，このような観点での分析，検討に必要な資料が見当たらなかった．そこで，ここでは，これまでのエブリクラブの活動から筆者らが考えたことについて記すことにする．

エブリクラブでは，年間の開催回数が４回であり，毎回単発の活動内容となっている．活動内容の設定は，チームでの取り組みがメインのゲーム（スポーツ，レク），自分で追及するものづくり，仲間と集う遠足，という多様な内容を準備している．それぞれの活動においてメンバーが打ち込む様子が見られる一方で，ものづくりは打ち込みやすいがスポーツは苦手，というメンバーもいる．これは，個別的な支援内容として理解し，対応していきたい．

また，活動内容が単発であることについては，年間の開催回数が４回であること，４回のうち一回（年度の３回目）にはエブリ教室とエブリクラブ合同の遠足を企画していることが前提となっていると，年間通じて，単発の活動内容であってもよいとも思える．しかし，一方で，メンバーがより活動に打ち込みやすいようにしたいというねがいを，より高い次元で実現していくことを目指すならば，「単元化」による活動の内容設定と展開も検討してもよいのかもしれない．単元化とは，同一内容を一定期間繰り返し取り組むという，展開の手法であり，月一回の開催であるエブリ教室ではそれに着眼し，その成果を確認している（佐々木，加藤，2008[14]）．これは，先に記した前提条件の変更をも視野に入れた検討になると思われる．関連して，開催回数を増やしてほしいという保護

者の要望が聞かれることがある．筆者らも同様の思いを持つ．これには，現在のエブリクラブの運営体制の検討も必要であるが，この話題は別の機会に検討する．

いずれ，活動内容の設定については，「行事単発型」と「テーマ追及（単元化）型」という選択肢があるが，現時点では，前者の型であり運営上無理がない．しかし，これに関しては，支援する側の都合ではなく，メンバーのニーズが根拠となって検討されることが理想である．

なお，活動内容の企画や運営に関しては，これまでスタッフの提案が主たる方法だったが，2008年度の活動である「プールと温泉（民間施設利用）」で試みられたようにメンバー発案の企画提案も，青年期の活動のあり方としては相応しいようにも思う．年間の活動計画については，その内容や運営方法をも含め，今後実践的に検討していきたい．

・毎回の活動における内容と展開

表２に示した活動の内容と展開例に基づいて，導入時の活動の内容と展開を例に検討する．ここでは，中心活動の内容が単発的な活動であるにせよ，それなりに打ち込みやすくなるようにと，次の２点を配慮した.すなわち,①共に活動するチームの仲間同士が打ち解けやすいように導入場面では，共同作業（「チーム名を決めること」や「メンバー表や得点表示板の作製」などの内容）を設定した．チーム名は，チーム名と同士の案を折衷するなどして，和気藹々とまとめ上げたものとなった．

②タグ・ラグビーの基本的動作の提示と，それに馴染みやすいようにウォーミングアップを兼ねて「タグ獲り鬼の変則ゲーム」を設定した．これによって，メンバーは，体をほぐすことに加え，自分が攻守いずれのプレーに興味関心や適性があるか，ということを判断し，チームでの攻守役割分担を話し合った．スムーズにチームの役割分担が決まり，プレーに関する作戦会議に移った．

中心活動によりよく取り組むための前後の活動，すなわち導入とまとめという「周辺活動」については，これまで「はじめの会」,「おわりの会」と称して，中心活動と切り離した内容や展開によって取り組まれてきた．例えば，これまでのエブリクラブもそうであったが，その活動の枠組みの原型となったエブリ教室では中心活動との内容的な関連性がなく，固定化した内容と展開による「はじめの会」と「おわりの会」が採用されていた(佐々木，加藤，佐々木，2002[15])．しかし，より中心活動に打ち込むことをねがったときに，中心活動に即して周辺活動の内容を設定することが実際的であり有効であると考えられる．表３の中では，「活動の準備」がはじめの会の中に位置づけられ，「ウォーミングアップ」は中心活動の中に位置づけられているが，両者はタグ・ラグビーの導入の活動であり，内容的な連続性を有している．

⑵「物」に関する例とその検討

支援の三観点の一つ,「物」とは，道具や補助具などに関する事柄である．

2006年度の「ものづくり」においては，フレームの製作にガストーチや電動工具のインパクトドライバーを用いた．これらは作業効率や仕上がりの精度を上げることはもとより，メンバーの興味関心を集め，かつ「面白そう」,「使ってみたい」,「使いこなしたい」という思いを駆り立てたようだった．

なお，これらの使用に際しては，安全に使用できることと，首尾よく使いこなせることができるような作業台や材料を固定する補助具などの支援もあり，先に記したメンバーの思いを実現できたと思われた．

⑶「人」に関する例とその検討

支援の三観点の一つ「人」とは，活動に伴う情報を伝える，感情を分かち合う,「伝達的機能」と「共感的機能」がある．

2005年度の「風船バレー」では，チーム内のメンバーとスタッフが一丸となって勝利を目指した．好プレーに対しては，ハイタッチをしたり歓声を

上げたりしながらゲームに取り組んだ．それがメンバー相互の賞賛や労い，励ましなどの「あたたかいメッセージ」の交流にも広がった．リーダー的なメンバーにあっては，積極的にチームメイトに声をかける様子も見られた．これは，スタッフの言動が「あたたかいメッセージ」のモデルとなっていることに着目すれば伝達的機能の発揮であるし，感情を分かち合っていることに着目すれば共感的機能の発揮である．共感的機能に関しては，スタッフがメンバーと共に活動に打ち込んでいるからこそ真に分かち合える思いが生じると思われる．そこに共感的機能の質的な成熟があるのではないか．また，伝達機能に関しては，スタッフが共に活動するほどに，さりげない形式でのかかわりになっていくのではないか．

３．青年期支援のあり方の検討

青年期に限らず，どのライフステージにおいても，その人なりの「自立と社会参加」の実現を目指したい．しかし，エブリクラブのメンバーの，多様な青年期の適応状況と，本来的・一般的に多様な青年期というテーマを考えたときに，青年期（あるいは，青年期にあるその人）に特化した支援内容や支援のあり方が問われる．

エブリクラブで担うべき役割が，彼らの休日活動であるとするならば，青年期の余暇活動というテーマをいかに支援するかを考えていきたい．余暇には「暇を持て余して半ば仕方なく取り組む次元」から「寸暇を惜しんで打ち込む次元」まで様々な次元が連続的に位置づけられるだろう．このイメージを図７に示した．前者の例は，「暇つぶしに，ショッピングモールをうろつくか」とか「暇だから雑誌でも読むか」というニュアンスのものである．後者の例は，「土曜日は，岩手山に登るぞ」とか「仕事の帰りに，週末に作る模型の素材を買いに行くぞ」というニュアンスのものである．

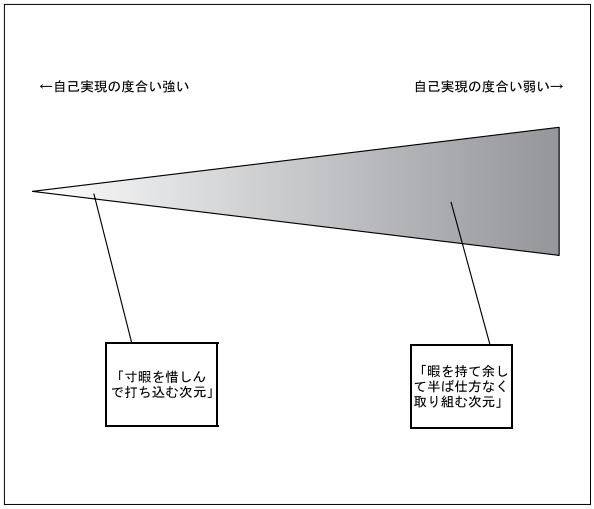


図７　余暇活動の次元に関する連続性のイメージ

また，青年期においては，生活の主軸である学校や職場での学びや仕事に打ち込み，「それ一色」というほど打ち込む姿もあっていいだろうが，学びや仕事とのコントラストとして打ち込める余暇活動があることも好ましい．筆者らは，メンバーが打ち込める，あるいは待ちわびるようなエブリクラブを目指したいと考えている．先の，余暇の連続的な位置づけでいうと，後者に接近する位置づけである．

青年期と言っても，エブリクラブにおいては中学生から成人まで（現在は中高生がメンバーの中心）である．彼らの加齢と共に，エブリクラブにおける青年期支援の内容やあり方も変化する余地は十分にある．青年期に特化した支援内容や支援のあり方を探りつつ，今後の実践を通じてさらに検討を深めたい．

Ⅴ　まとめと今後の課題

本稿では，エブリクラブの経緯を報告し，その意義として，青年期の彼らにとっての，休日活動の提供であること，そこでの自立的・主体的活動の実現という努力目標を指摘した．また，その実現状況を逸話として例示し，それに資した支援方法を「活動」，「物」，「人」の観点から分析，検討した．

今後の課題として，第一報での指摘内容を踏まえ以下のように考えた．第一報で指摘した課題には，以下の３つがあった．すなわち，①実践を継続する中で，筆者らの臨床的直感に依拠した支援内容，支援方法，支援の結果を科学的に検証する

こと，②各年齢段階における，適応状況や，教育的ニーズにかかわる客観的データ収集と分析，③「よりよい人間関係」に収束されず，独立的にあるいは関連しながら位置づけられる支援内容（例えば，家族支援や支援システムなど）の把握と検討，である．

①については，エブリクラブの方針転換を受け，ソーシャルスキルトレーニングの検討ではなくなったものの，参加者にとっての自立的・主体的活動の実現を目指しての検討という意味合いでは今後も取り組むべき課題である．

②と③については，関心の高い内容であるが，岩手県内において，青年期への関心を高めている各専門領域があり，様々な立場からの取り組みがなされつつある現在，エブリクラブが独自に取り組む必然性が少ないと思われる．むしろエブリクラブでは，青年期にまつわる全体的な調査研究というニュアンスではなく，メンバー一人一人を適切に支援するために，その生活状況を把握するという，個別的な取り組みこそエブリクラブには必要であると思われる．

上記から，今後の課題として２点を指摘し，さらに考察にて指摘された３点を加える．すなわち，①参加者の自立的，主体的活動の実現に関する具体的な内容と支援方法の開発と蓄積，②参加者一人一人の生活状況の把握，③年間の活動計画の内容と運営方法についての検討，④支援方法とメンバーの姿の因果を分析しやすい記録の方法の開発と採用，⑤青年期における支援内容や支援のあり方の検討，である．

注釈

文中の氏名は仮名とした。

謝辞

エブリクラブのメンバーと保護者の皆様，共に活動したスタッフ諸氏に記して感謝いたします．

文献

1）佐々木全，加藤義男，田代美幸（2004）：高機能広汎性発達障害児・者への支援の取り組み－「いわて高機能広汎性発達障害児・者を考える会」の模索・草創－，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，３，131－141.

2）佐々木全，加藤義男（2005）：高機能広汎性発達障害児の指導に関する実践的研究⑶－「エブリクラブ」の教育実践に関する報告－（第一報）－岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，４，129－146.

3）佐藤克敏・徳永豊（2006）：高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援の現状，特殊教育学研究，44，３，157－164.

4）山口薫（2006）：大学におけるＬＤ学生への学習支援―星槎大学の試み　ＬＤ研究，15，３，297－301.

5）西村優紀美2006　学生相談の立場から　ＬＤ研究，15，３，302－311.

6）日本ＬＤ学会研究委員会研究プロジェクトチーム　2008　大学における発達障害のある学生支援事例の実態調査報告―試行的取り組みに見る支援の実際とサポートの充実に向けて―　ＬＤ研究17，２，231－241.

7）近藤隆司・光真坊浩史2006高等学校における軽度発達障害をもつ生徒への就労支援の試み，特殊教育学研究，44，３，１，47－54.

8）清水聡，加賀信寛，山本仁，内藤孝子，梅永雄二　2006，軽度発達障害者の就労と社会自立を考える，ＬＤ研究15，１，57－71.

9）梅下節瑠　2004家庭事件に見る成人の高機能広汎性発達障害　こころの臨床，23⑶，306－311.

10)松浦直己，岩坂秀樹，藤島清，橋本俊顕，十一元三(2007)，多様な発達的困難性のある少年に対する，矯正教育における一事例―個別の教育的ニーズに基づいた支援を通して―，ＬＤ研究，16，３，332－344.

11）佐々木全，加藤義男（2008）高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第八報）－参加児童の自立的・主体的な活動を支える，ＩＥＰのあり方の検討⑴－岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，７，195－216.

12）佐々木全，加藤義男（2005）：前掲論文２）

13）佐々木全，加藤義男（2007）高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第七報）－今日的観点からの検討－岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，６，165－181.

14）佐々木全，加藤義男（2008）高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第九報）－「単元化」した活動の意義やあり方の検討－岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，７，217－230.

15）佐々木京子，加藤義男，佐々木全（2002）：高機能広汎性発達障害児の指導に関する実践的研究－認知特性に注目して－，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，１，205－218.